

築百二十年 古民家

聴福庵

ミタモルズエメールマガジン

第74号特別企画 妖怪特集

日本には、長い年月を経た道具に
魂が宿り動き出す『付喪神』と

言われる妖怪がいます。

『付喪神絵巻』に記された物語では、器物は百経つと

精霊を宿し付喪神となるため、人々は「煤払い」と称して
毎年立春前に古道具を路地に捨てていたそうです。

廃棄された器物たちが腹を立てて節分の夜に妖怪となり
一揆を起こすも、人間や護法童子に懲らしめられ、

最終的には仏教に帰依をすると物語のなかでは語られています。



鞍馬天狗のお面



①唐笠小蔵

傘（からかさ）の妖怪。から傘おばけ、傘おばけ、傘化け、一本足、からかさ一本足などとも呼ばれる
歌川芳員『百種飲談妖物双六』一本足



明治の和傘 大正初期の傘立て

和傘・番傘は竹を材料にし作製した骨組みに、和紙を張り防水を施した傘のことをいいます。江戸時代に生まれ庶民の間で広く使用されたそうです。



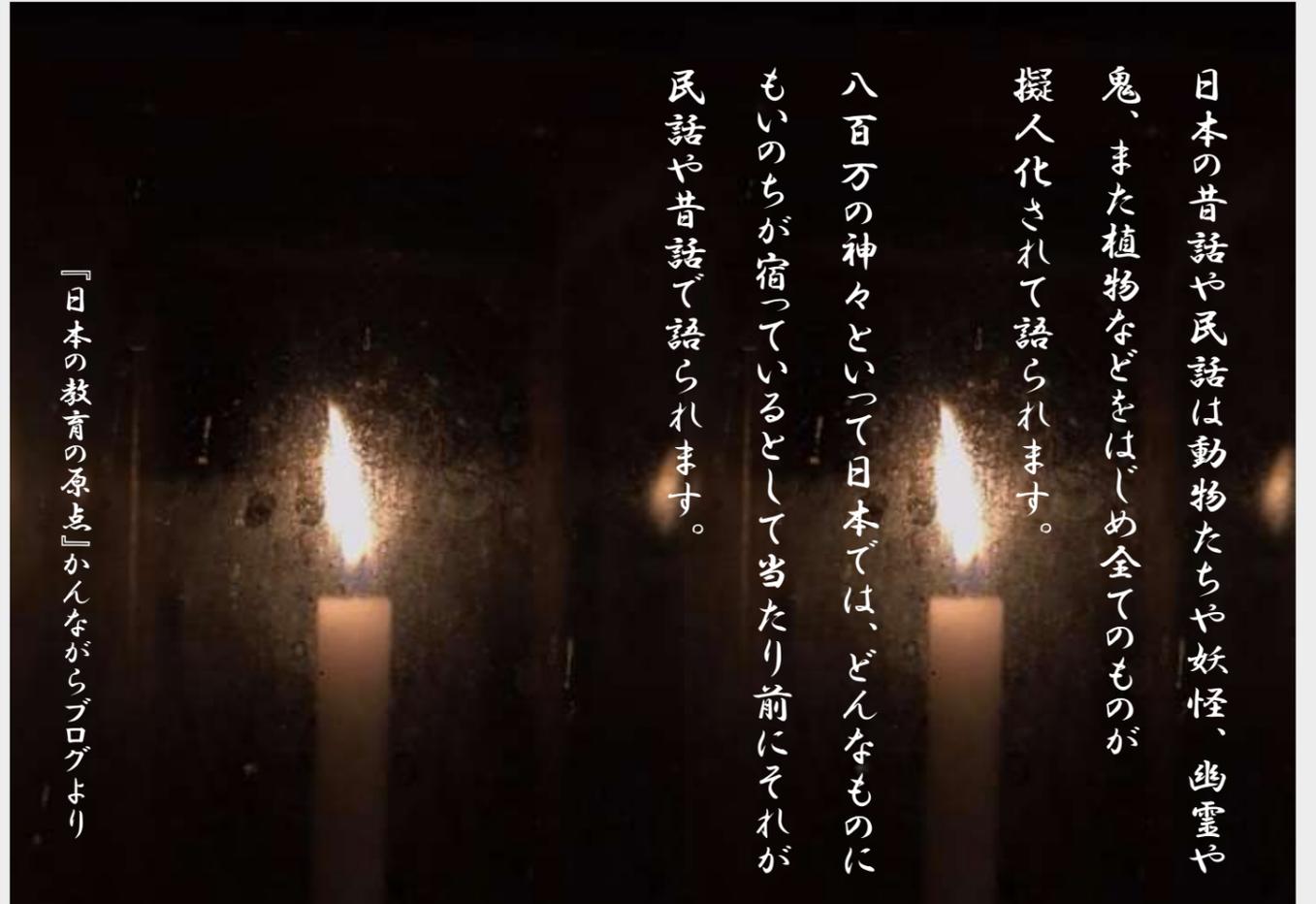
②屏風関（びょうぶのぞき）

屏風関とは屏風の外側から人を覗き込む妖怪で、7尺もの屏風の向こうをも覗くとされる。一方では、多くの男女の秘め事を見続けてきた寢室の屏風が付喪神になったものが屏風関との説もある。
鳥山石燕による妖怪画集『今昔百鬼拾遺』



木製の屏風

室内に立てて風を防ぎ、または仕切りや装飾に用いる調度品として使われます。
木製だけでなく、紙製・布製の屏風もあります。



日本の昔話や民話は動物たちや妖怪、幽霊や鬼、また植物などをはじめ全てのものが擬人化されて語られます。
八百万の神々といつて日本では、どんなものにもいのちが宿っているとして当たり前前にそれが民話や昔話で語られます。

『日本の教育の原点』かんながらブログより

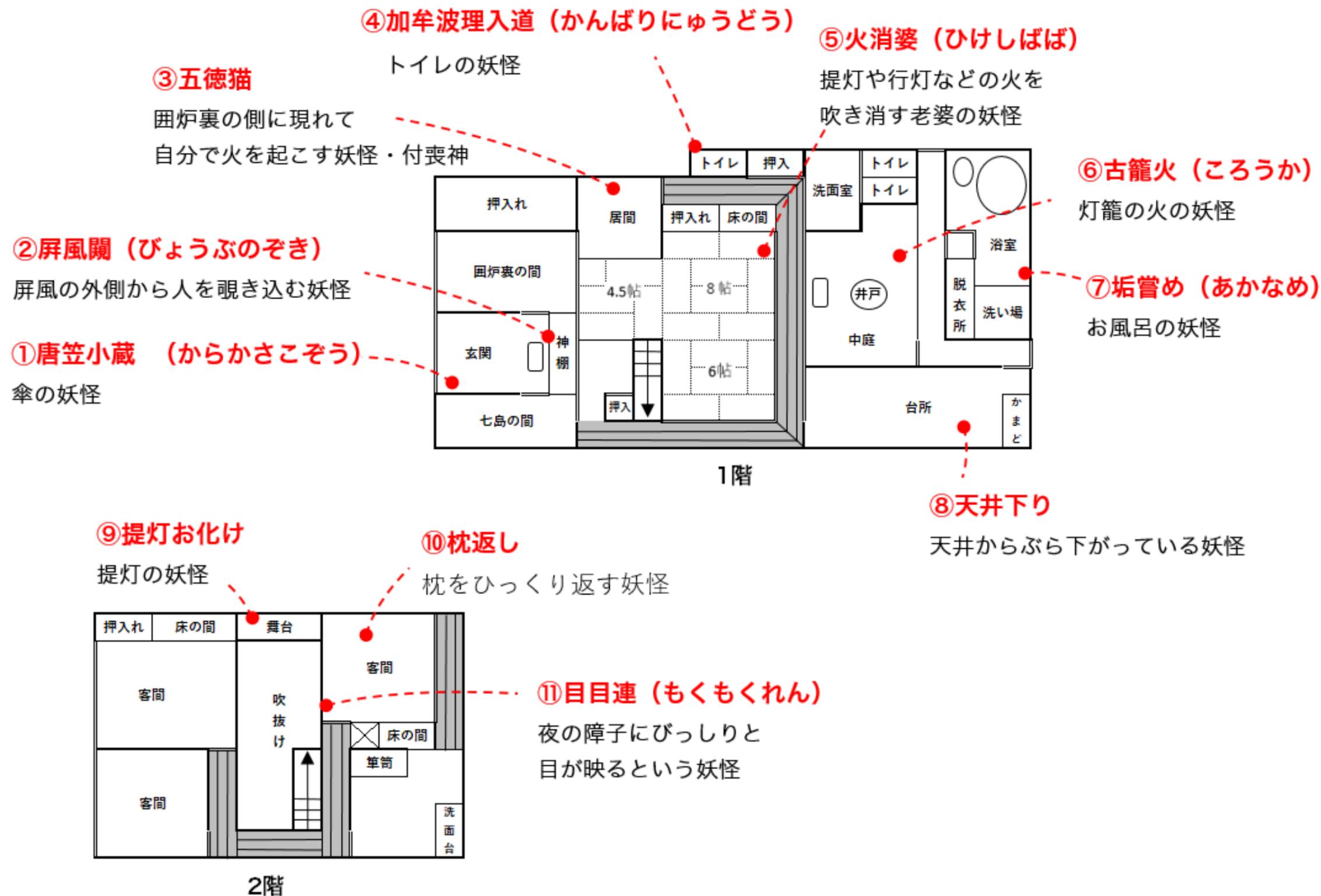
子どもの頃、幽霊やお化けは私にとって、怖い存在でした。目には見えないけれど、でも、いるかもしれない。と思うと、後ろを振り返ったり、トイレに一人で行くのも嫌になった、そんなことを思い出します。
そして、『聴福庵』には100年を超える道具がいくつもありま
す。夏のこの季節、寝静まりかえった夜に、この道具たちが動き出しているかもしれません。
「畏怖」という体験も子どもたちにとって大切なことだと思
うと、『聴福庵』は、現代において幽霊たちにとっても同世
代の道具が多い住みやすい環境なのではないかと思えます。
夏のこの時期、夜にもしかしたらあなたの後ろにも……。

『聴福庵』には、どんな妖怪がいるの！？

出たら怖いが見てみたい！！『聴福庵』妖怪一覧マップ

『聴福庵』には100年を超える道具がいくつもあります。100年経つと道具に魂が宿り、「付喪神」と呼ばれる妖怪として動き始めると言われています。

そこで、夜になると姿を現すかもしれない妖怪たちを実際に『聴福庵』に置いてある道具と交えて、妖怪たちと共に紹介していきます。





③五徳猫

本の尻尾を持つ猫が、五徳（囲炉裏で鍋・やかんなどを乗せる台足）を冠のように頭に頂き、火吹き竹を持って囲炉裏で火を起こしている姿で描かれている。鳥山石燕の『百器徒然袋』



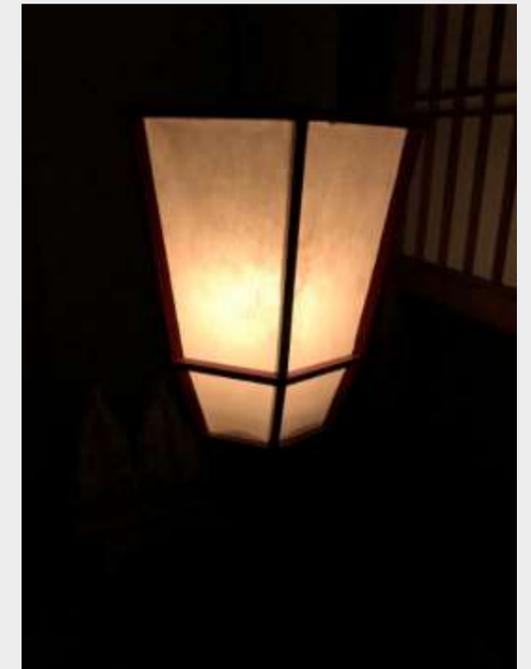
真鍮五徳

真鍮五徳の時代は不明ですが、お茶を沸かす時や煮炊きするときにいつも用いています。煮炊きだけでなく、冬には手をかざすと温かな火で体を温めています。



⑤火消婆（ひけしばば）

人家の中の提灯や行灯などの火を吹き消す、老婆の姿の妖怪。陰気存在である妖怪は火などの陽気を苦手とするため、その火を消す存在が火消婆だとされる。鳥山石燕『今昔画図続百鬼』



木製和紙行燈

古く日本で用いられた照明器具の一つ。木や竹で角形または円筒形の枠を作って紙を張り、底板に皿を置いて火をとすもの。明治半ばまで使われていたそうです。



④加牟波理入道

廁に現れる妖怪として口から鳥を吐く入道姿で描かれ、大晦日に「がんばり入道郭公（ほととぎす）と唱えると、この妖怪が現れないと言われています。鳥山石燕の画集『今昔百鬼拾遺』



お手洗い

福岡県の秋月で130年以上続く老舗和紙製造の4代目井上賢治さんに漉いて頂いた和紙が、お手洗い全面に貼られています。



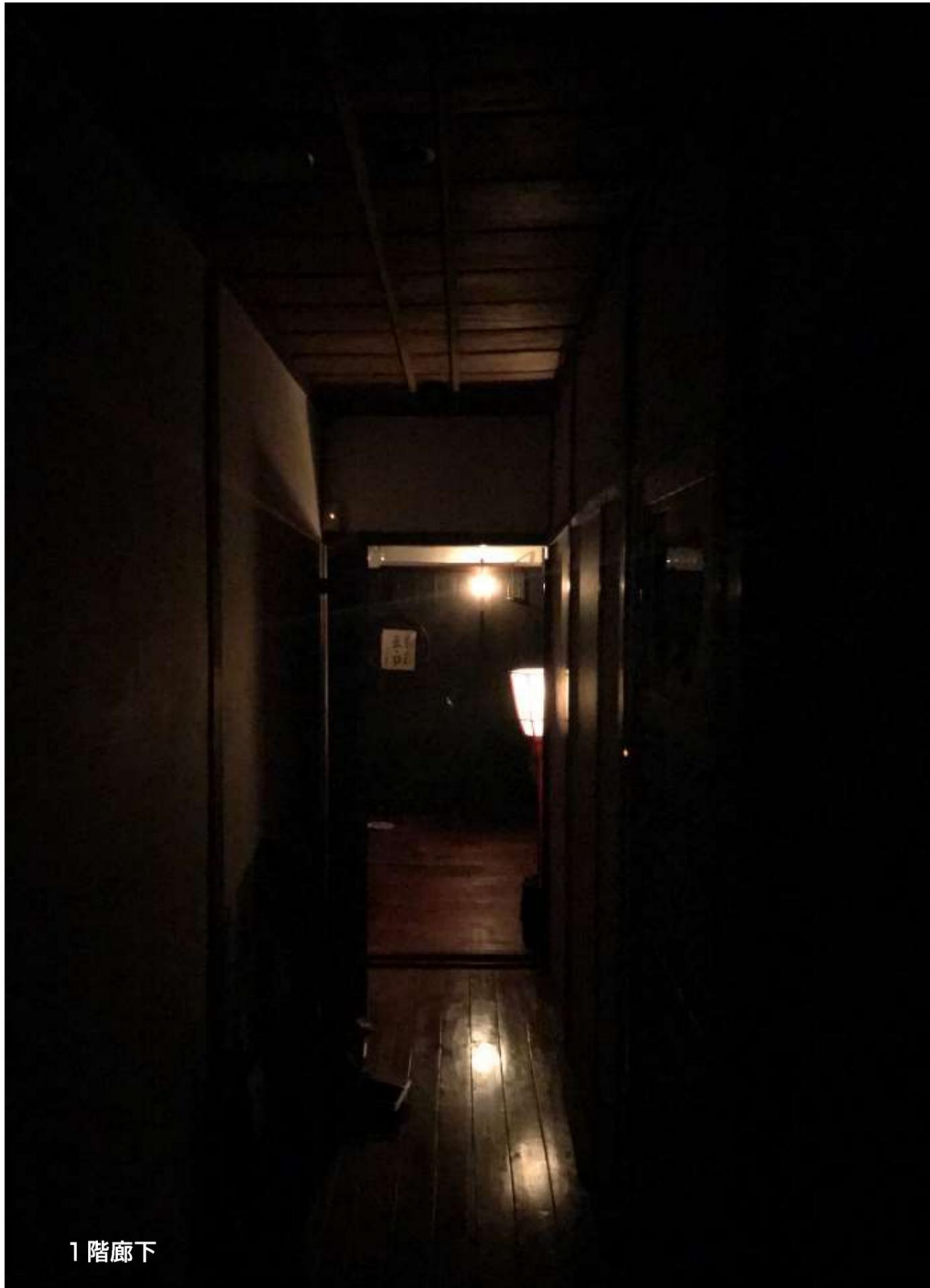
⑥古籠火（ころうか）

石灯籠の上に座り火を口から吐いているすがたで描かれている。灯籠の火の妖怪として石燕が描いたものであると考えられている。鳥山石燕の『百器徒然袋』



明治～大正時代 春日石燈籠

春日神社で使われている石灯籠に代表される石灯籠の形式。火袋は六角柱で、二面に雌雄の鹿、他の二面に雲形の日月が彫られ、残りの二面は彫られています。



1階廊下



⑦垢嘗め

風呂場の垢を舐める妖怪です昔の人はこれが来ないように風呂場を綺麗にしていたと言います。
鳥山石燕『画図百鬼夜行』



古式工法で建てた風呂場と奈良漬けの樽の風呂

樽は佐賀県にある漬物屋「たぞう」から50年以上経過している樽を譲って頂き、風呂場は古式工法で縦の風が抜ける形式で建てられています。



⑧天井下り

長い髪を振り乱した醜い老女が、家の天井から逆さまでぶら下がった姿として描かれている。夜中などに家の天井から突然現れるが、特に人間に対して危害を加えることはない。
鳥山石燕『今昔画図続百鬼』



煤竹天井

富山にある築200年の古民家と福岡県柳川の古民家から譲り受けた煤竹です。
煤竹とは、古い茅葺屋根の屋根裏や天井からとられる竹建材のことで、100年~200年以上の年月をかけ、囲炉裏の煙でいぶされて自然についた茶褐色や飴色に変色した竹建材です。



⑨提灯お化け

神家総本家『聴福庵』提灯

提灯が上下にパッキリと割れ、その割れた部分が口となって長い舌が飛び出し、提灯の上半分には一つ目ないし二つの目がある。葛飾北斎『百物語』お岩さん

浅草の提灯屋「大嶋屋恩田」に文字入れを依頼。
<https://www.chochin-ya.com/>
提灯 13 号：左右に”家紋”、両面に”神家総本家聴福庵”



⑪目目連（もくもくれん）

夜の障子にびっしりと目が映る妖怪で人を驚かせる以外に特に悪さはしない。鳥山石燕の画集『今昔百鬼拾遺』



秋月和紙を使用した障子

福岡県の秋月で 130 年以上続く老舗和紙製造の 4 代目井上賢治さんに漉いて頂いた和紙。



⑩枕返し

夜中に枕元にやってきて、枕をひっくり返す。頭と足の向きを変えるとされている。その姿は子供、坊主であるともいわれるが、明確な外見は伝わっていない。鳥山石燕の画集『今昔百鬼拾遺』



木綿の和布団と枕

高温多湿の日本の風土に適った布団素材としてまたは、長く親しまれてきたのが木綿の和布団です。木綿綿は吸湿性・保温性に優れ、復元力に富んでいます。



枝桜の襖に映る木の影



井戸のお祓い

【天邪鬼】 わざと他人の言行に逆らう捻くれた者。
語源…「天探女(あまのさぐめ)」という悪神の名前が転訛したと言われる。天探女は「古事記」や「日本書紀」の神話に出てくる神で、人の心の内を探り意に逆らう、ひねくれた神。

【狐の嫁入り】 日が照っているのに急に小雨が降ること。
語源…夜、遠くの山野に狐火がいくつも連なっていることを、狐が嫁入りする提灯に見立てたもの。狐火は狐の口から吐き出された火と言う俗信がある怪奇な青白い火で、恐れられていた。日が照っているのに雨がばらつく現象を、狐火の怪しさのようであることたとえ、日照り雨を「狐の嫁入り」というようになった。

【天狗になる】 いいきになって自慢する。得意になる。
語源…「天狗」は深山にすむという想像上の妖怪。赤い顔をし、鼻が異様に高く、山伏姿で、手には団扇や混合杖を持ち、翼があつて空を自在に飛び回り、神通力をもつとされる。その天狗の鼻が高いところからたとえていうもの。



妖怪に関することわざ

【まゆつばもの】 騙されないように用心すること。
語源…眉に唾をつければ狐や狸に騙されないという俗信から生まれた言葉。
【海千山千】 世の中で様々な経験を積み、物事の裏表を知り尽くして賢いこと。
語源…「海に千年、山に住んだ蛇は竜になる」という言い伝えを人間の経験にあてはめたもの。
【置いてきぼり】 置き去りにすること。
語源…江戸本所七不思議のひとつ「置いてけ堀」の故事に由来。夕方に釣った魚を魚籠(びく)に入れ帰ろうとすると、釣った魚を堀に返すまで、堀の中から「置いてけ、置いてけ」と言う声が聞こえたという話。「錦糸堀」「亀戸東方の堀」など諸説あり。
【天狗になる】 いいきになって自慢する。得意になる。
語源…「天狗」は深山にすむという想像上の妖怪。赤い顔をし、

【妖怪を通して思うこと】

子どもの頃、幽霊やお化けは私にとって、怖い存在でした。目には見えないけれど、でも、いるかもしれないと思うと、後ろを振り返ったり、トイレに1人で行くのも怖くなる。そんなことを思い出しました。

図を引用した鳥山石燕さん（とりやま せきえん 1713-1788）は、江戸時代中期の浮世絵師で、ゲゲゲの鬼太郎の作者、水木しげる氏も参考にした妖怪画家師だそうです。

今回、特集を組むに当たりたくさんの妖怪たちの絵を見てきましたが、ユニークな妖怪たちや絵巻が昔から多く残っていることを知りました。

現代の妖怪の代表アニメと言えば、ゲゲゲの鬼太郎や妖怪ウォッチ、今も昔も妖怪は人の心を離さない目には見えない魅力があるのかもしれない。

「畏怖」という体験も子どもたちにとって大切なことだと思うと、VRでは感じられない、不思議な体験があるように思います。『聴福庵』には100年を超える道具がいくつもあり、夏のこの季節。寝静まりかえった夜には、この道具たちが動き出しているかもしれません。

妖怪は怖いだけでなく、子どもたちに大人になる上で、大切なことを教える存在でもあったのだと感じます。ネオン輝く都会では、もう妖怪たちも出て来られないのかもしれませんが、『聴福庵』には幸い、100年を超える道具も多く、住みやすい環境なのではないかと思います。

この特集の下調べを「聴福庵」の2階の角部屋でしていたのですが、1階に降りるのが何だか怖くなる。そんな、子どもの頃に体験したあの感覚を久しぶりに味わいました。

『聴福庵』の妖怪一覧マップを作ってみました。どこの部屋からも出るかもしれないと思うと、見てみたいけれど、やっぱり会いたくはない。そんなことを思います。

『聴福庵』にある道具はどれも物語があり、その一つ一つを大事に子どもたちへも伝えていきたい、そんなことを妖怪たちを通して改めて感じました。

 **caguya**

〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。



暗闇に浮かぶ行灯の明かり